

# 琵琶湖という遊び場

文 今森光彦  
Inanori Mitsuhiro

画 浅妻健司

琵琶湖というと私の場合は、やはり子どもの頃のことを思い出します。

その当時、湖の岸辺ではいつも独特のにおいが漂っていました。腐敗した野菜や、魚の体臭などが入り混じった複雑なおいひです。砂利浜には、おびただしい数の貝殻が打ち上げられていました。セタシジミやマツカサガイ、大きなドブガイもありました。二枚貝だけでなくタニシのような巻き貝も混ざっていたように思います。浅瀬を覗き込むと、トウヨシノボリやヌマチチブなどが、苔のついた石の隙間から顔を覗かせています。古くなくなった棧橋の杭があると、そのまわりで踊り狂うようにコアユが群れていたものです。

自宅の近くにヨットハーバーがあって、そこでよく魚釣りをしました。今では絶滅危惧種になってしまった、琵琶湖と淀川水系だけに棲む日本の固有種、ワタカもたくさんいました。釣りポイントになつていた理由は、港に注ぎ込む水路の河口から、豚や鶏の糞が大量に流れ込んでいたからです。糞は、動物性プランクトンを増殖させますので、それを食べる魚が集まるというわけです。化学洗剤などの毒物が流れ込む前の有機的な繋がりをもった健全な水がそこにありました。

はやる気持ちをおさえながら、早速釣り糸を垂らしました。しかし、何時間たってもいっこうに獲物ばかりありません。そのうち、私たちの隣で一人の青年が竿を垂らしはじめました。するとすぐさま釣り竿がしなり、手のひらほどの大きさのごとくな魚がかかったではありませんか。腕の良い青年が釣った魚を見せてもらって驚きました。なんとそれは、外来種のオオクチバスという魚だったのです。私たちが釣れなかったのは、餌が間違っていたからでした。というよりは、私が目的としているタナゴやフナは、そのときすでにオオクチバスに追いやられてしまい内湖から姿を消していたのです。

青年から色々と教わって、釣具屋さんで外来種用のセットを調達し、再度挑戦してみると、簡単にオオクチバスやブルーギルがかりました。まきに入れ食いです。これらの魚は、獲物をいっきに飲み込む習性があるので、釣り針が喉の奥にささり、一度アタックすると、外れることがありません。子どもでも簡単に成果があるので、十分楽しませてもらえるというわけです。しかし、そこには、魚と知恵比べをするようなスリリングな楽しみはありませんでした。その日は、私はとても虚しい気持ちになって帰宅したのを覚えています。

私が生きていた頃の釣りと比べると、魚の種類によつて、釣り方が違っていました。例えば、釣り糸には、

生物の豊かさに陰りが見え始めるのは高度成長期以降です。琵琶湖総合開発計画がはじまり、琵琶湖の整備がおこなわれるようになりました。湖に流れ込む川にダムがつくられ、岸辺が護岸工事され、田んぼの整備が進みました。住民の排水の浄化処理の規制も厳しくなり、琵琶湖の水の透明度は、次第に高くなっていきました。この清潔感と引き換えに、昔から嗅いできた懐かしいにおいが薄れてゆきました。

現在、「琵琶湖の水は、きれいになりましたか」と問われれば、だれもが、きれいになりました、と答えるでしょう。実際、水面をのぞくと、透明なおいもありません。

しかし、このことが、はたして琵琶湖のほんとうの美しさにつながるのでしょうか。20年前、幼稚園児や小学生になつたばかりの子どもたちを連れて、魚釣りに出かけました。私としては、何十年ぶりの久々の釣りです。訪れたのは、子どもの頃足繁く通ったヨシの茂る内湖。到着すると、さすがに奥深いヨシ原は、影を潜めていました。舗装された道路が岸辺まで迫って、周辺は宅地になっていました。しかし、魚のいそうな深みのある場所は、まだ残つていそうです。

浮きや鉛や針がついていて、水深によって、浮きの位置を変えることができました。つまり、水中の中層を泳ぐ魚を狙うときは、浮きと針の間隔を短くして、餌が湖底につかないようにします。土泥を好む魚を狙うときは、竹竿を水中に差し込んで深さを測り、浮きと針の間隔をその長さにします。それと、餌も使い分けました。コイやフナには、芋やさなぎ粉（カイコの蛹の粉末）をメリケン粉と練つたもの、タナゴやワタカには、さし虫（ハエの幼虫）、モロコヤハヤは、赤虫（ユスリカの幼虫）というふうな、魚の好みをすべて知っていて目標を定めました。

琵琶湖の魚釣りは、子どもの遊びとはいえ、それこそ真剣勝負。経験や知識から運動神経にいたるまで、全身全霊をつくしてやっていたように思います。はたして私が生きていた頃の遊びと似たような琵琶湖は再び戻ってくるのでしょうか。在来種の復活はもちろん、湖岸がもう一度、子どもたちの感性を育む遊び場になってほしいものです。

いまより・みつひこ 写真家。1954年、滋賀県生まれ。独学で写真技術を学び、80年よりフリーランス。以降、琵琶湖をとりまくすべての自然と人との関わりをテーマに撮影。一方、熱帯雨林から砂漠まで、広く世界の辺境地の取材を続け、数多くの作品を発表。主な受賞歴に、アニメ賞、木村伊兵衛写真賞、毎日出版文化賞、産経児童出版文化賞、土門拳賞ほか。

